

- 産業教育WG第3回ヒアリング -

MHSで動き出す、福祉×探究の学び

愛知県立古知野高等学校

2025.12.16

目次

- 1 | 本校の概要
- 2 | 福祉科の概要
- 3 | MHSの取組
- 4 | 学びの深まり
- 5 | さいごに



1

沿革

1949(昭和24)年:
小牧高等学校古知野分校として開設。(定時制1学級)

1952(昭和27)年:
古知野高等学校として独立。(定時制3学級)

1997(平成9)年:
介護人材の需要拡大という社会的要請を受けて、福祉科が開設された。全日制4学科と定時制(普通科)の併設となる。

2

各学科の概要

地域ビジネス科 ITビジネス科	4学級 160名	マーケティングコース、 観光コース、プログラミングコース、ICTコース
生活文化科	1学級 40名	被服コース、食物コース
福祉科	1学級 40名	介護職員初任者研修及び 介護福祉士養成課程

3

福祉科スクールポリシー

○福祉・介護の専門的な知識と技術に基づき、状況に応じた介護を実践できる人

○互いの価値観を認め、相手の立場に立って考えられる人

○多様な人と関わるためのコミュニケーション方法を身に付け、実践できる人

○福祉・介護の専門職として、課題解決に向けて他者と協働できる人

○地域に貢献しようとする強い意志を持ち続けることができる人



4

教育課程表(地域ビジネス・ITビジネス科)

1年生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	現代の国語	言語文化	公共	数学Ⅰ	科学と人間生活	体育	保健	英語コミュニケーションⅠ	家庭基礎	ビジネス基礎	簿記	情報処理	HR																	

2年生	学科	コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	地域ビジネス	マーケティング 観光	文学国語	歴史総合	数学Ⅰ	化学基礎	体育	保健	音楽	英語コミュニケーションⅡ	ビジネス・コミュニケーション	マーケティング		商品開発と流通		ソフトウェア活用	◇1		HR													
	ITビジネス	プログラミング ICT										観光ビジネス		グローカルプロモーション			財務会計Ⅰ		ソフトウェア活用		プログラミング		ネットワーク活用									

◇1:総合選択科目:原価計算、ファッショントピカル造形基礎

◇2:総合選択科目:ビジネス・マネジメント、ファッショントピカル造形基礎

3年生	学科	コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	地域ビジネス	マーケティング 観光	文学国語	地理総合	数学A	生物基礎	体育	英語コミュニケーションⅡ	課題研究	総合実践	ビジネス法規		古知野未来学		◇3		HR															
	ITビジネス	プログラミング ICT									ネットワーク管理		◇4		◇5																	

◇3:総合選択科目:ネットワーク活用、フードデザイン

◇4:総合選択科目:グローバル経済、フードデザイン

◇5:総合選択科目:観光ビジネス、フードデザイン

・「総合的な探究の時間」は、「課題研究」の履修をもって替える。

・「情報Ⅰ」は、「情報処理」の履修をもって替える。



2年次から専門コースに分かれて実践的に学ぶ。地域ビジネス科は、マーケティングコースと観光コースに分かれ、企業との商品開発や観光施設での宿泊研修を通して、地域理解とビジネスマナーを身に付ける。両コースとも、ショッピングモールや宿泊施設での継続的なインターンシップにより実践力を高める。ITビジネス科は、プログラミングコースとICTコースに分かれ、自動化やAIを扱う開発力、Webサイト構築などの情報発信力を養う。

5

教育課程表(生活文化科)

1年生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	現代の国語	言語文化	公共	数学I	科学と人間生活	体育	保健	英語コミュニケーションI	家庭総合				生活産業基礎	ファッション造形基礎				フードデザイン	HR											

2年生	コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	被服	文学国語	歴史総合	数学I	化学基礎	体育	保健	音楽	英語コミュニケーションII	生活産業情報	ファッション造形基礎	ファッション造形				フードデザイン	生活文化	◇1	HR												
	調理											英語コミュニケーションII	生活産業情報	ファッション造形基礎	調理																

◇1:総合選択科目:生活と福祉、ビジネス・コミュニケーション

3年生	コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	被服	文学国語	地理総合	数学A	生物基礎	体育	英語コミュニケーションII	課題研究	生活産業情報	保育基礎	ファッション造形				◇2	HR															
	調理										英語コミュニケーションII	生活産業情報	保育基礎	調理																	

◇2:総合選択科目:食文化、ネットワーク活用

- ・「総合的な探究の時間」は、「課題研究」の履修をもって替える。
- ・「情報I」は、「生活産業情報」の履修をもって替える。



生活文化科は、2年次から被服コースと食物コースに分かれる。被服コースでは、ブラウスやワンピース、浴衣などを製作し、課題研究で完成させた作品は文化祭のファッションショーで披露する。食物コースは、和食・洋食・中華料理など幅広く学び、栄養や食品の知識と調理技術を身に付ける。両コースとも、被服製作・食物調理技術検定1級～3級の合格を目指す。

6

教育課程表(福祉科)

…介護福祉士養成課程に必要な科目

1年生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	現代の国語	言語文化	公共	数学 I	科学と人間生活	体育	英語コミュニケーション I	家庭総合	社会福祉基礎	介護福祉基礎	生活支援技術	介護総合演習	介護実習	こころとからだの理解	HR																

2年生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
	文学国語	歴史総合	数学 I	体育	音楽	英語コミュニケーション II	家庭総合	社会福祉基礎	介護福祉基礎	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程	介護総合演習	介護実習	こころとからだの理解	HR																	

3年生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
	文学国語	地理総合	数学A	生物基礎	体育	英語コミュニケーション II	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程	介護総合演習	介護実習	こころとからだの理解	福祉情報	HR																				

・「保健」は、「こころとからだの理解」の履修をもって替える。

・「情報 I」は、「福祉情報」の履修をもって替える。

・「総合的な探究の時間」は、「介護総合演習」の履修をもって替える。

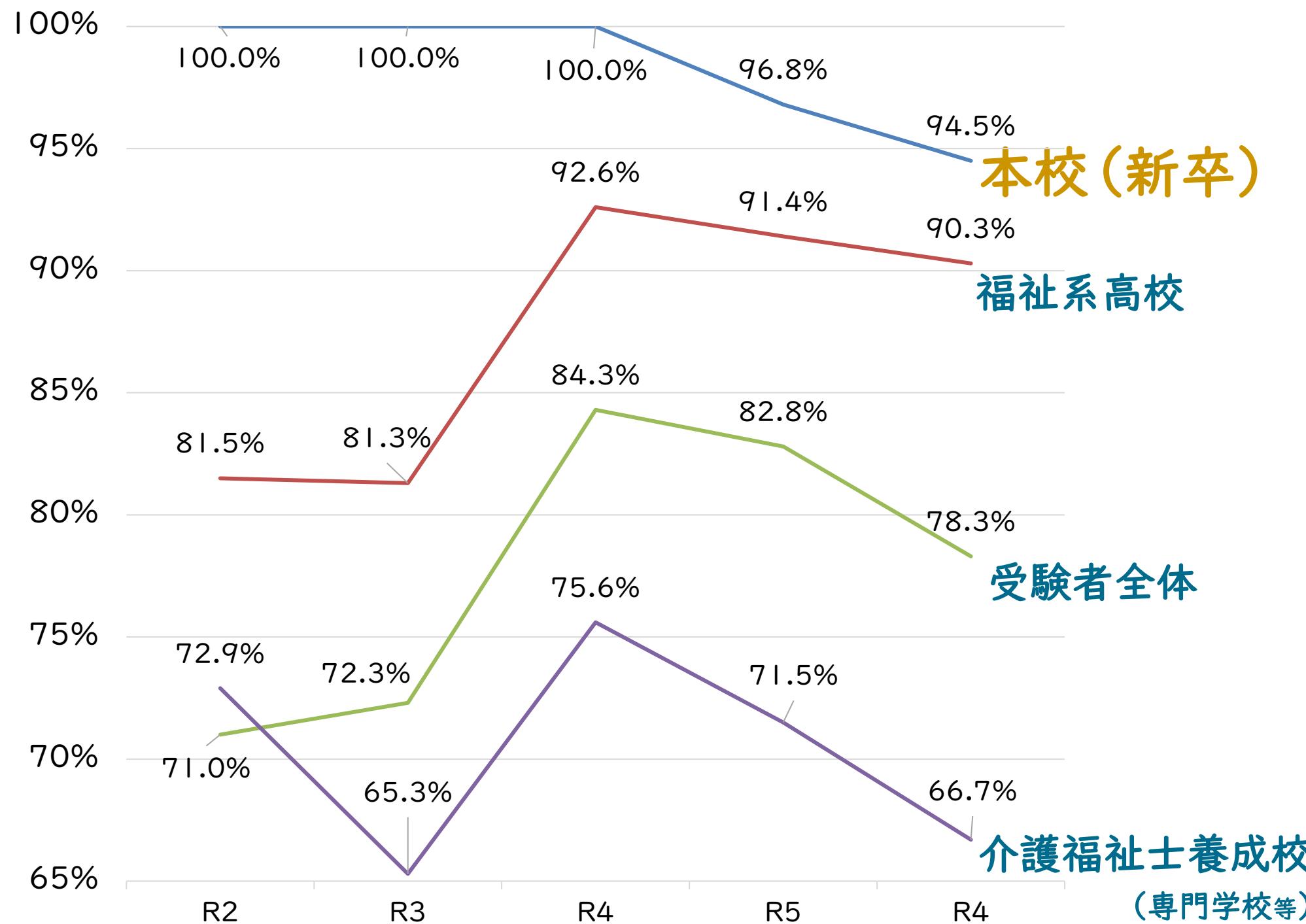
介護実習(450時間/3年間)

1年生	9日間	障害者支援施設(4日)、高齢者通所施設(5日間)	2単位
2年生	19日間	高齢者通所施設(10日間)、高齢者入所施設(9日間)	5単位
3年生	24日間	高齢者入所施設(24日間)	6単位



1

介護福祉士国家試験合格率の推移(過去5年間)



平成9年度の開設以来、
約900名の
介護福祉士を
地域に輩出している。

2

福祉科の進路状況(過去5年間)

過去5年間の卒業生

177名

進路類型

医療福祉分野への進路が約9割!!

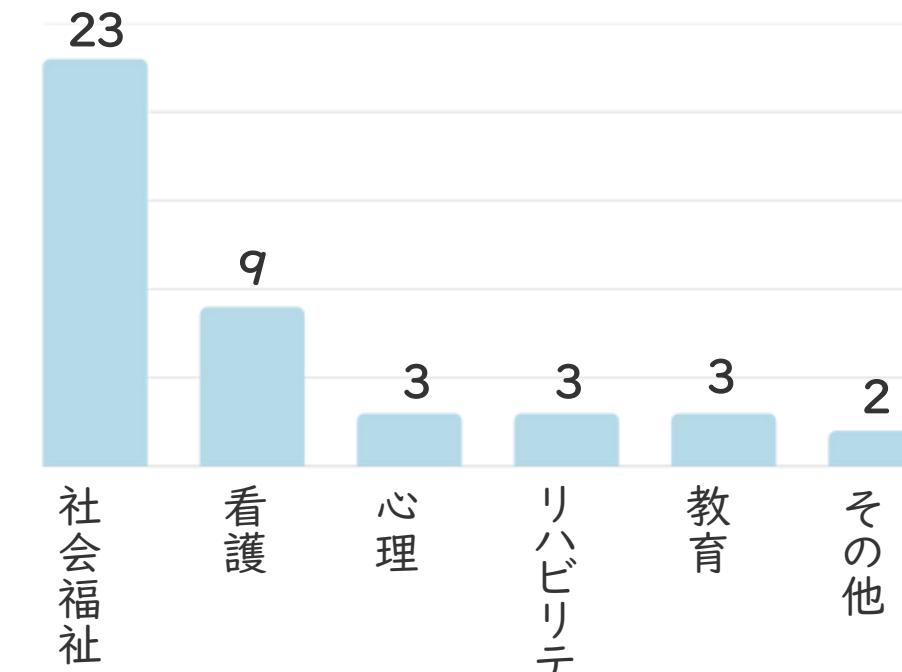
進学:98名
55.4%就職:76名
42.9%

その他:3名

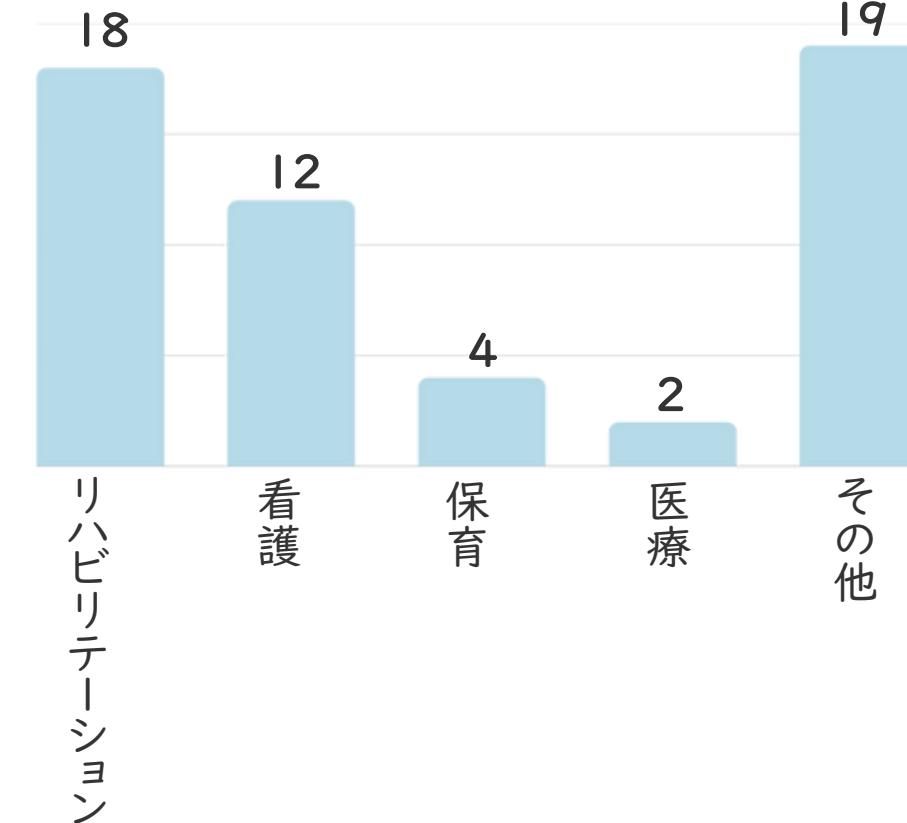
1.7%

進学者内訳

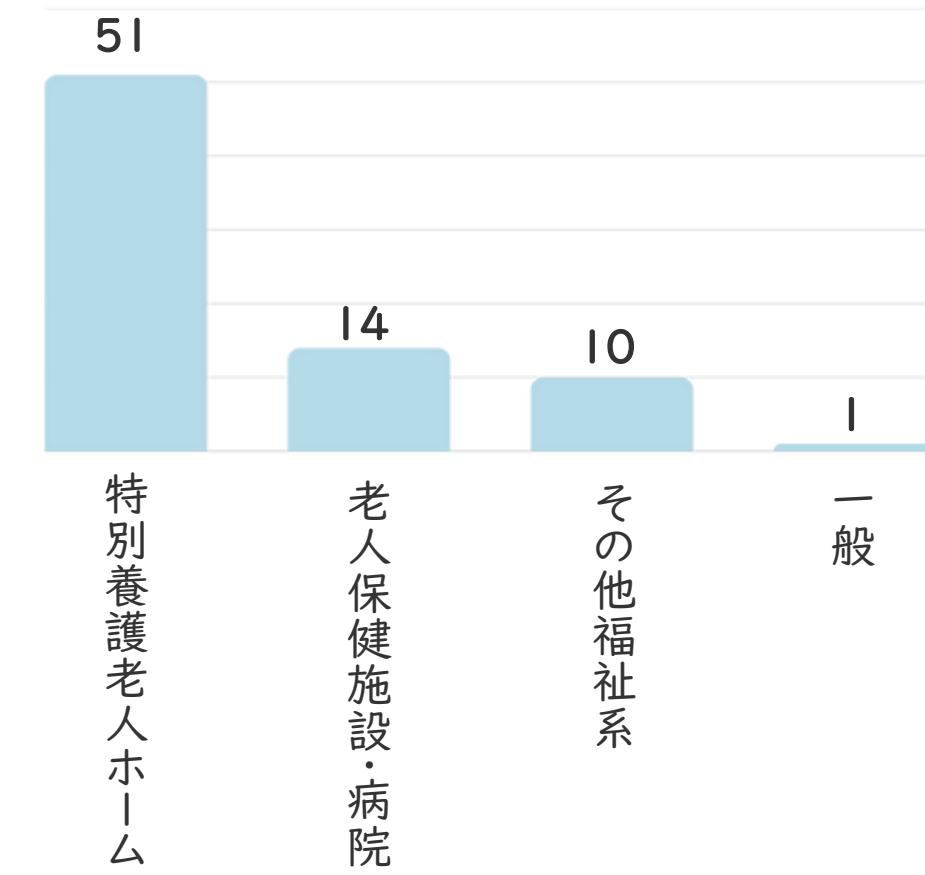
【大学】



【短大・専門】



就職者内訳



1

科学的裏付けに基づく介護 (EBC)

01

介護×ICTの実践
-テクノロジーの善き使い手に-

1年生は産業実務家教員の授業で最新のICT・IoT技術を学んだ。また、2年生は先進的に介護DXを実践されている施設への見学を通じてテクノロジー活用力の育成を図った。



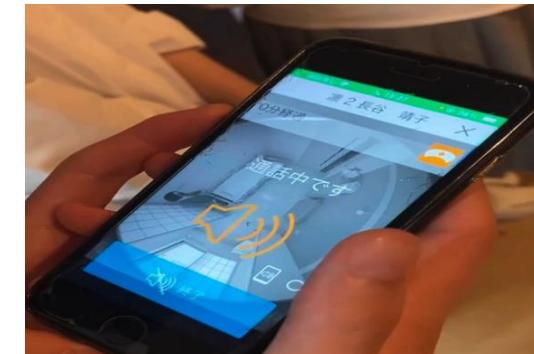
産業実務家教員による授業



音声入力による介護記録



先進事例を学ぶ施設見学



見守りシステムの体験

02

科学的介護の実際
-データを活用した介護過程の展開-

1年生は、特別養護老人ホームの施設長から、生活場面における科学的介護の実践を学んだ。2年生は、3名の大學生教員によるリレー講義を通じて介護データの分析を学び、情報活用能力の向上を図った。



産業実務家教員による授業



最新福祉機器の体験

03

認知症ケア最前線
-科学的アプローチで症状改善-

2年生は、認知症グループホームの施設長から回想法やユマニチュードなど非薬物療法を学び、認知症の人を尊重したケアを習得した。秋の介護実習では学んだ知識と技術を生かし実践を重ねた。



産業実務家教員による授業



認知症サポーター養成講座



当事者理解を進めるワーク



介護実習におけるケア実践

現行の学習指導要領では、「福祉用具や介護ロボット等に関する学習の充実」が示され、介護ロボットの意義や活用を理解し、利用者の生活を豊かにする視点が求められている。MHSでは、単に“知る”“使う”段階にとどめず、歩行・睡眠・体圧などの介護データを根拠に、目の前の対象者にどのような支援が必要かを考える学びへと発展させていく。ロボットや機器はあくまで手段であり、「何のために使うのか」を理解した上で活用できる人材の育成を重視している。

2

課題解決型学習 (KOCHINO PBL)

04

「つながり」を実感できる地域づくり
-共に生きる力を育む-

地域とのつながりが希薄化する中、生徒主体で認知症カフェを運営し、地域と交流を深めた。また、PBLアドバイザー（福祉系大学教員）の指導の下、「共に生きる力」を育む福祉教育プログラム（啓発冊子）を作成した。



地域会議への参加



認知症カフェの企画・運営

05

福祉・介護の魅力発信
-THINKER to DOER-

地元の介護施設や福祉を学ぶ高校等と連携して福祉・介護の魅力をSNSで発信する活動を進めた。また、市社会福祉協議会と連携して家族介護教室の動画作成に携わった。取組の様子は、FUKUSHI FESで発表し、県内の高校生にも成果を共有した。



コラボ動画作成・発信



家族介護教室の動画作成

06

元気で笑顔あふれるまちに
-高校生考案の健康づくり-

予測されている要介護者の増加に対応するため、PBLアドバイザー（県理学療法士会の講師）の指導の下、フレイル予防や認知症予防の健康づくり体操を考案し、近隣の有料老人ホームで実践させていただいた。



PBLアドバイザーの指導



プログラムの検討



フレイル予防体操の実践



認知症予防体操の実践



大学生とのディスカッション



他校とのオンライン交流



介護職員へのインタビュー



FUKUSHI FESでの発表

各チームは3つの分野から関心のあるテーマを選び、チームを構成する。「認知症の方や家族が孤立しない場づくり」「子どもたちの共に生きる力の育成」「介護職の魅力が伝わらない状況の変革」「高齢者が楽しみながら健康を維持できるコンテンツ開発」といった地域の福祉課題を設定する。こうした課題を出発点に、生徒たちはPBLアドバイザーの助言を受けながら、自らの問い合わせを深め、解決策を“地域に寄り添う形”で検討していく。

3

課題解決型学習 (KOCHINO PBL) -科目横断的な探究の実際-

科目「社会福祉基礎」(1年生)

1年生の社会福祉基礎では、地域共生社会の実現をテーマに、地域福祉の意義や役割を学んでいる。江南市社会福祉協議会を訪問し、地域の現状や課題について説明を受けたうえで、生徒は自分たちにできる取り組みをグループで検討し、課題解決のアイデアを発表している。



科目「介護福祉基礎」(2年生)

2年生では、実際にKOCHINO PBLを進める。1年次の学びを生かし、江南市の「地域福祉計画」や「介護保険事業計画」を読み込み、市内の福祉課題を把握したうえで関心のあるテーマを選択する。活動はPBLアドバイザーの指導・助言を受けながら進め、取り組みの振り返りや非認知能力の可視化も行っている。



科目「介護総合演習」(2年生)

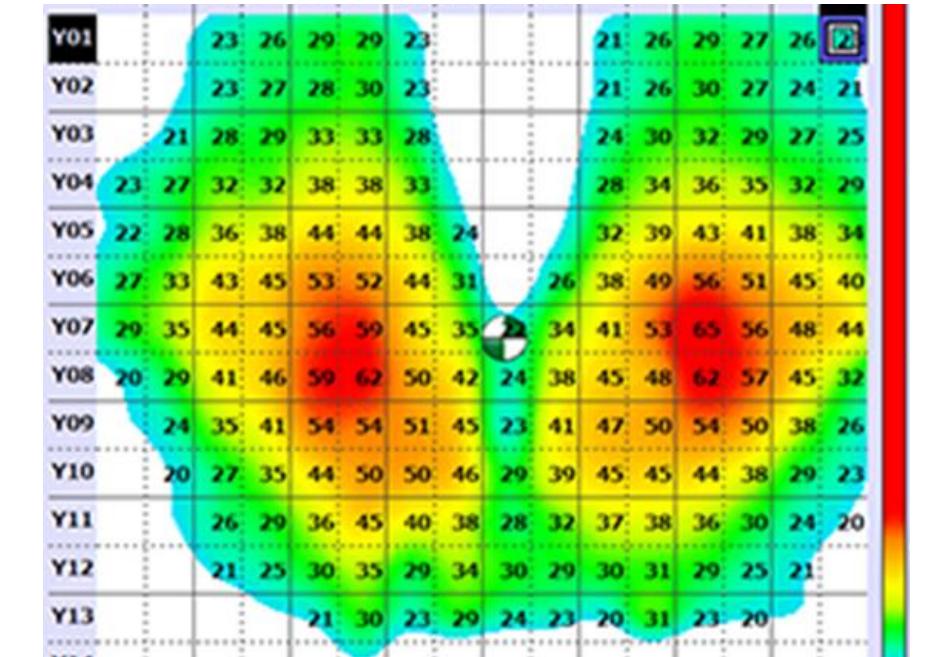
2年生の介護総合演習では、KOCHINO PBLの進行管理と成果発表に向けた準備を行う。生徒は進捗報告会で活動内容を共有し、非認知能力のスコアを活用しながら自分たちの取り組みを振り返り、次の行動につなげている。成果報告会には、これまでPBLに関わってくださった地域や施設の方を招き、外部から講評をいただく予定である。さらに、県内の福祉を学ぶ高校が参加する「FUKUSHI FES」でも成果を発表し、他校との学びの共有を図っている。



1

科学的裏付けに基づく介護(EBC)

データ分析からの気づき



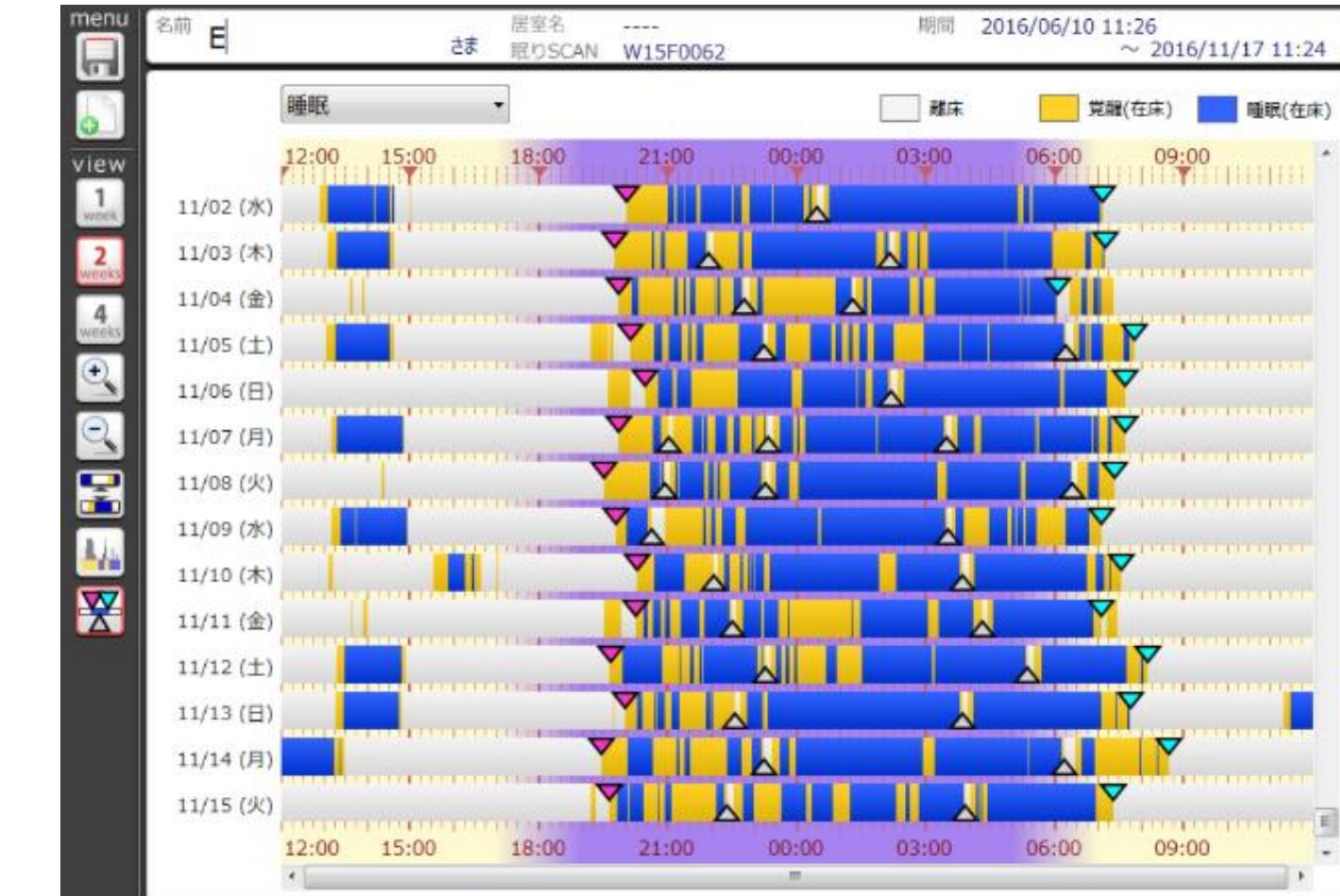
歩行測定では歩幅や重心の揺れ、左右バランスといった情報が可視化されるため、歩行状態を客観的に理解できる。歩行のくせや靴のすり減り方、杖をつく位置など、転倒リスクにつながる要素を多角的に捉えるアセスメントの視点が広がった。

また、体圧分布の学習は3年次の介護実習でも活用された。車いすで食事をしていた利用者から「臀部が痛い」との訴えがあった場面で、生徒は足台に足を置いたままの姿勢では臀部に圧が集中する可能性が高いと判断し、「いすに移り替えて姿勢を整えた方が痛みが軽減するのではないか」と職員に提案した。

2

科学的裏付けに基づく介護(EBC)

テクノロジーとの向き合い方



離床センサーでは、アラームが鳴ってから利用者さんのもとへ行くと介護者の負担が大きいため、まずはその人の特性を理解するためにセンサーを使用し、そこから得た情報を解析、分析しアラームが鳴る前に利用者さんの対応ができるようにしたい。

2年生・男子

AIは、行き詰ったときに新しい視点を与えてくれる。だけど、AIの判断をそのまま介護に使うと、本当のニーズを見逃す危険もある。だからこそ、AIは“情報を広げる道具”として活用し、利用者に寄り添う判断は私たちが担うことが大切。



2年生・女子

3

課題解決型学習 (KOCHINO PBL)

試行錯誤を通じたレジリエンスの育成



市内で認知症カフェを立ち上げることになり、本校生徒も開設当初から関わってきた。カフェのテーマは、「認知症の人をまんなかに、安心できる場をつくること」。参加者同士の会話や気持ちの聞き取りを重視していた。一方、生徒たちは、レクリエーションを通して交流の時間を設けたいと考えていたが、その提案は採用されなかった。

改めて話し合いを行った結果、「参加者に本当に必要な活動とは何か」を再検討したうえで、回想法の考え方を取り入れた“昔遊び”を提案したところ、参加者から良い反応があり、主催者側もその効果に新たな気づきを得ることができた。この提案には、生徒が他の科目で学んだ「薬に頼らない認知症ケア」の知識が生かされていた。また、生徒にとっては、困難を乗り越える力(レジリエンス)を高める経験にもなった。

4

課題解決型学習 (KOCHINO PBL)

専門性を越えて生まれる学びの価値

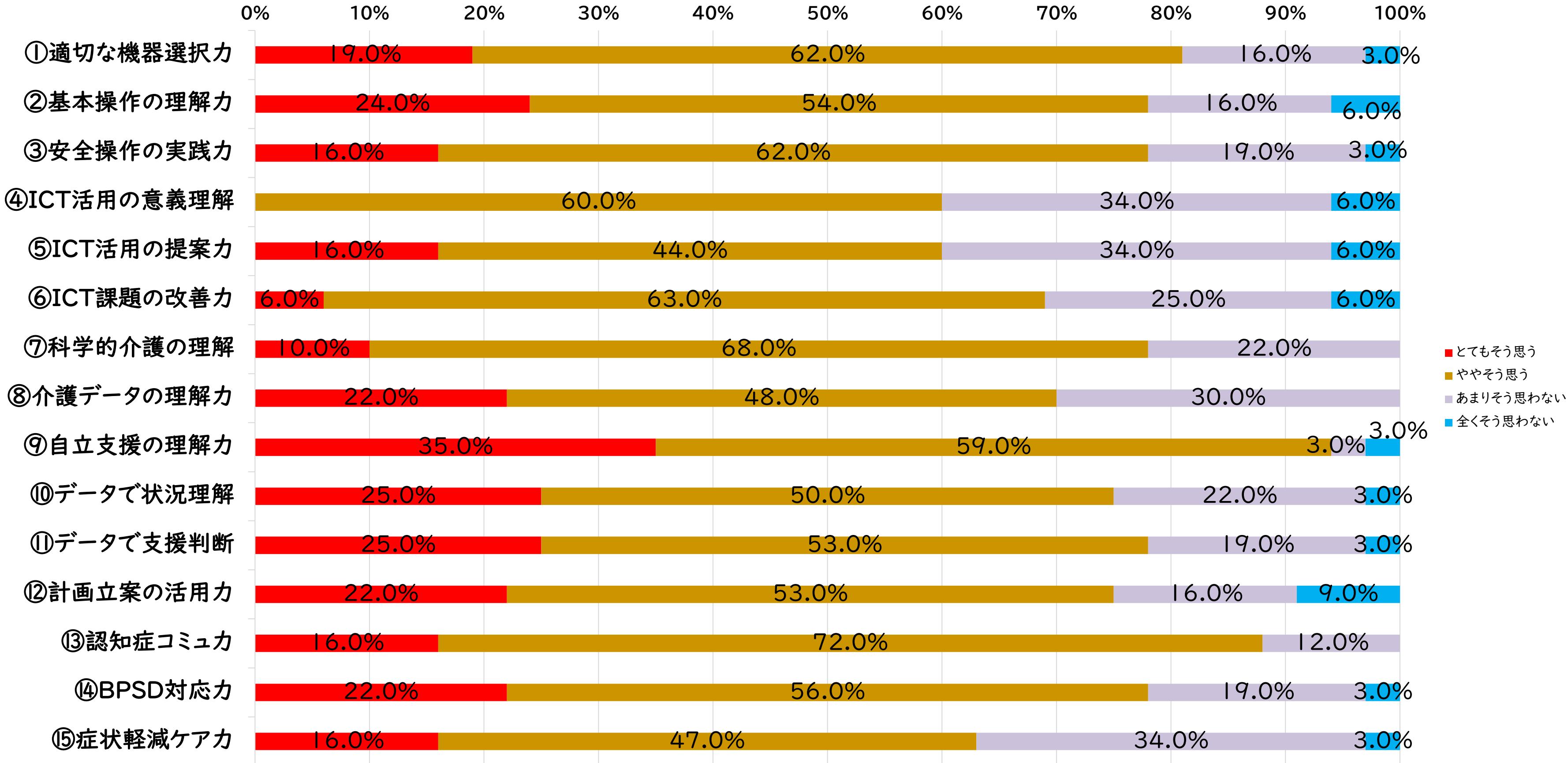


認知症VRコンテンツの開発では、映像系専門学校の学生と協働。専門学生は福祉初心者のため、「認知症の症状で幻視が見える」と説明しても伝わらない。生徒たちは、症状名だけでは相手に十分伝わらず、自分自身の理解も浅かったことに気づいた。そこで、認知症専門看護師やグループホームの職員に「当事者にはどのように見えるのか」を丁寧に聞き取り、その内容をもとに専門学生へ分かりやすく説明し直した。一方で、福祉科の生徒は映像制作の素人であり、専門学生から撮影技術や構成の工夫を学ぶ場面も多い。他分野と協働することで、互いが今まで持ち得なかつた視点が生まれている。

介護予防プロジェクトでは、高齢者が思わず体を動かしたくなるようなポップな音楽に合わせたエアロビクスの開発を進めている。音楽教員からリズムやテンポの作り方の助言を受けるなど、教科横断的な連携も芽生えている。

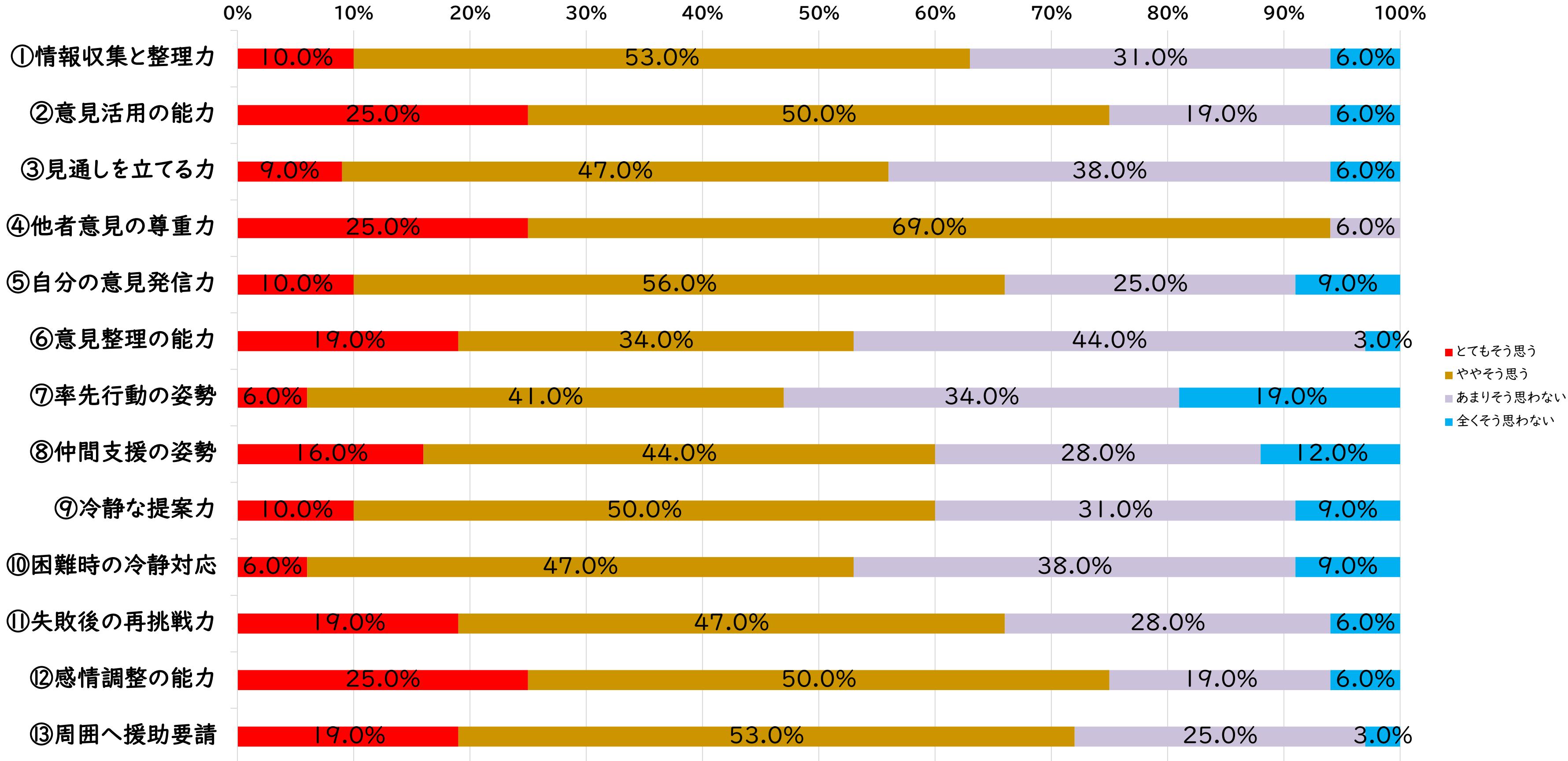
5

令和6年度生徒評価アンケートより(科学的裏付けに基づく介護)



6

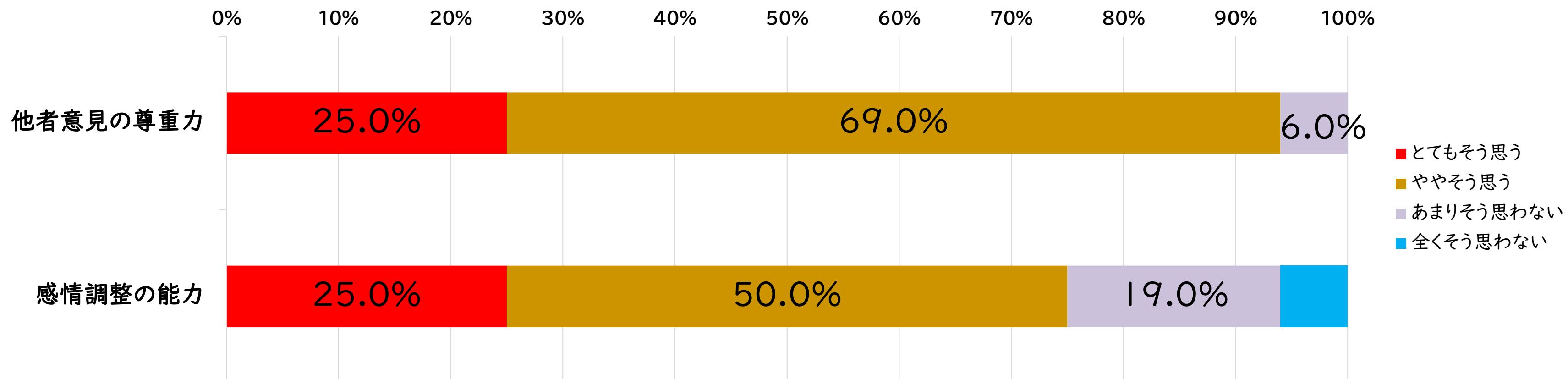
令和6年度生徒評価アンケートより(課題解決型学習)



7

令和6年度生徒評価アンケートより(抜粋)

課題解決型学習(コミュニケーションスキル/レジリエンス)



PBLを振り返って



2年生・女子

仲間と協力してプロジェクトを進めていく大切さを実感した。自分たちが、本当に地域の役に立つか不安だった。しかし、チームの仲間とさまざまな意見を出し合い、より良いプロジェクトとして地域に貢献することができた。将来、介護の現場で働く時にも、介護職員同士互いに声を掛け合いながら、利用者の方にとって安心できる支援を生み出していきたい。

PBLを通して、自分の意見を少しずつ言えるようになった。これまでには周りに合わせてしまうことが多かったが、“よりよいものを作りたい”という思いから勇気を出して発言してみると、仲間が受け止めてくれ、自分の考えが形になっていく嬉しさを知った。将来は介護の現場で、利用者の方のために自分の意見を大切にしながら、仲間と協力して質の高い支援を届けられる介護福祉士になりたい。



2年生・女子

福祉科の発展のために大切にしていきたい3つのポイント

—マイスター・ハイスクールを経て見えてきたこと—

① 根拠に基づき、“問い合わせる”力 —— 探究的思考

テクノロジーによって蓄積されたデータと真摯に向き合い、「なぜそうなるのか」「本当にそうか」と自ら問い合わせを立てる姿勢を育てたい。与えられた問い合わせに答える学びから、自ら問い合わせをつくり、探究を重ねる学びへと転換することで、福祉・介護の現場で求められる判断力を養っていきたい。

② 答えがない課題に向き合う力 —— 探究の持続性

地域や福祉の現場では、すぐに答えが見つからないことや、解決よりも“伴走”する姿勢が求められる場面が多い。ゆらぎや葛藤の中でも関係を続け、寄り添いながら歩み続ける経験こそが、生徒の学びを深めていく。こうした“関係を継続する力”を大切に育んでいきたい。

③ 専門性を越えて価値を共創する力 —— “閉じて磨く専門性”から、“開いて進化する専門性”へ

芸術、メディア、デザインなど、一見つながりが見えない分野との出会いが、新たな発想や価値を生み出す力になる。未知の領域に踏み出し、越境しながら専門性をアップデートしていく“ワクワクする学び”を大切にしたい。